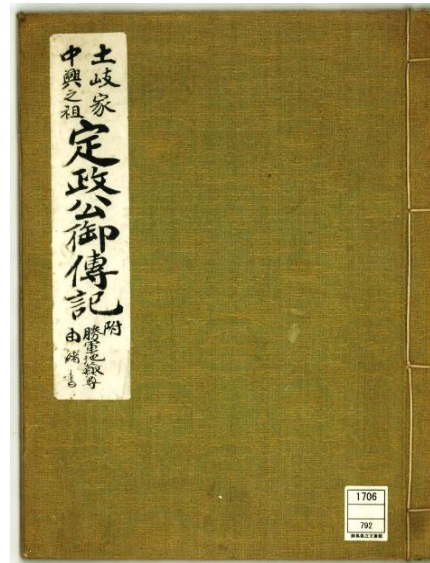


と き さだまさこうおんでん き
9 土岐家中興之祖定政公御伝記
しょうぐんじぞうそん
附勝軍地蔵尊由緒書 *写 (部分)

成立：正徳4年 (1714年) 3月

沼田藩土岐家に伝来した初代土岐定政の伝記の写本です。定政は、美濃土岐氏庶流の明智氏の出身で、少年時代から徳川家康に近侍したとされている武将です。初め菅沼を名のり、後に家康の命を受けて名字を土岐に改めます。展示部分は、天正12年(1584年)に尾張国長久手で徳川家康と豊臣秀吉が対峙した合戦を書いた場面です。定政の軍功により家康軍は勝利し、家康が定政の功を大いに称えたことが記されています。

加藤史夫家文書 P1706 No.792



〔9〕「土岐家中興之祖定政公御伝記附勝軍地蔵尊由緒書」

(P1706 加藤史夫家文書 No.792)

〔読み下し文〕

(表紙)

與秀吉有隙秀吉遣池田勝入森長一襲尾州信雄乞援於太祖太祖起自濱松經三川至桑名屯軍小牧山秀吉自將十萬騎至濃州壁于樂田密遣游騎伺我軍定政麾下士有井上某捕獲乘白馬候伺者又獲邏卒佩飛檄於項者以獻太祖大悅稱定政之得士四月九日官軍與豊臣秀次戰于長曲堤秀次敗走池田將校伺隙將起前隊直襲中軍定政覺之單騎要之路逆擊之手殺騎兵三人僕亦斬一人定政急麾左軍合為一隊備之由是敵不得敢進遂散敗官軍乘銳追擊之勢如疾風暴雨斬首一

萬級定政從者井上今泉加藤菅沼輩亦各獲首級是日秀吉將池田及長一隕命日己夕矣太祖振旅而入小幡壘太祖召見定政曰頼汝摧挫之力我軍獲全今日之得捷乃汝之績也時大久保忠隣侍坐太祖顧而謂曰定政立於將卒之間非獨善戰臨時制變陷敵死地侘日授以方面之任我其高枕矣秀吉聞池田及長一戰沒不忍憤怒進兵陣于龍泉寺與官軍對壘神祖遣候騎偵軍勢使馳還報曰敵兵今且至諸軍氣懼神祖遣定政觀其虛實定政軍騎直入敵營按視部陳還言曰有何虞乎

(前略)

秀吉と隙有り、秀吉池田勝入・森長一を遣し尾州を襲う、信雄援を太祖に乞う、太祖濱松より起ちて三川を経て桑名に至り、軍を小牧山に屯す、秀吉自ら十萬騎に將とし濃州に至り、樂田に壁す、密かに游騎を遣わし我が軍を伺う、定政麾下の士井上某と云うもの有り、白馬に乗れる候伺いの者を捕え獲り、又邏卒の飛檄を項に佩ぶる者を獲り以て獻す、太祖大いに悦びて定政の士得たりと稱す、四月九日官軍豊臣秀次と長曲堤に戦う、秀次敗走し、池田の將校を校し伺わしめ、將に前隊を超えて直に中軍を襲わんとす、定政之を覺り、單騎にしめ之を路に要さえて、逆つて之を撃つ、手から騎兵三人殺し、僕も亦一人を斬る、定政急に左軍を廳て合わしめ一隊と為し之を備ふ、是に由て敵敢えて進む事を得ず遂に散敗す、官軍銳に乗せしめ追ひ撃つるの勢疾風暴雨の如し、斬首一萬級定政の從者、井上・今泉・加藤・菅沼の輩亦各首級を獲たり、是の日秀吉の將池田及び長一命を隕しめ日己に夕へせり、太祖振旅しめ小幡の壘に入る、太祖定政を召し見て曰く、汝が摧挫の力に頼みて我が軍全を獲たり、今日の捷を得る事乃ち汝が之績也、時に大久保忠隣侍坐せり、太祖顧みて謂て曰く、定政立ちどころに將卒の間に於いて独り善く戦うのみに非ず、時に臨みて變を制し敵を死地に陥れる、他日授るに方面の任を以てしめ我れ其枕を高くせんと、秀吉池田及び長一戦没を聞きて憤怒するに忍びず、兵を進めて龍泉寺に陣す、官軍と壘を對す、神祖候騎を遣わしめ軍勢を偵わしむ、使い馳せ還りて報せしめ曰く、敵兵今且つ至ると諸の軍氣懼れる、神祖定政を遣わしめ其の虚実を觀せしむ、定政單騎にしめ直に敵營に入りて部陳を按視す、還りもうしてもうさく何を慮るかあらんとか、

(後略)